

# 学生による授業評価アンケートからみた授業改善策

## －「創意工夫」の観点から－

今井 晋哉（徳島大学 総合科学部）

### はじめに

筆者の担当する全学共通教育「ドイツ語入門」・「ドイツ語初級」の授業内容や教育理念を、とくに「創意工夫」の観点から紹介せよ、というのが本誌編集者からの要請である。だが、そもそも明確な理念のもとに授業をしているわけではないし、とくに「創意工夫」をこらした覚えなどない。たしかに筆者のこれらの科目についての授業評価アンケートにおいて、「良かった点」として「説明がていねいでわかりやすい」、「板書が見やすい」、「授業中に見せてくれるドイツに関するビデオが興味深い」というようなことが、自由記述の形で挙げられることはある。しかし、いまだ映像資料を用いることなど、ほとんどの教員が実行しているだろうし、説明や板書、発声のことは、われわれ教師業にとってはイロハに属することであろう。ときおり「先生の話が面白い」という声が聞かれることもあるが、単なるウケねらい（筆者の悪い癖である）がたまたまヒットしただけのことかもしれないし、たとえ教育上有意義な点があるとしても、「何がどうしておもしろいか」など、FDのような場で説明できることではない。

日ごろ筆者は、おそらく多くの同業諸氏と同じく、おしゃべりの部類に入る。話しても書いても長くなりがちで、指定の範囲に収めるのにひと苦労である。だが上記の「良かった点」をめぐって筆者が意識していることについて記しても、数行で終わりそうである。今回ばかりは、2000－3000字のレポートのスペースを埋めるのに苦しむ学生諸君の気持ちがよくわかる（困った）。などとぼやいていても始まらないので、今回は学生諸君の協力を得ることにした。

### 授業評価アンケートの自由記述から―授業の「良かった点」（教員の創意工夫など）について

今回の原稿依頼のもとになった授業評価アンケートは、2010年度前期末のものであろう。そのとき筆者が担当していたのは、社会創生学科1年生向けのクラス（受講者29名）、医学科1年生向けのクラス（同じく42名）、光応用工学科1年生を中心とするクラス（22名）であった。「創意工夫」についての設問の獲得ポイントは、順に4.1、4.4、3.8である（さほど高得点とは思えないが）。しかし、このときの回答には自由記述が比較的少なく、「創意工夫」について回答するとき、どういうポイントが受講者の念頭にあったのかがつかみにくい。

そこで、そのとき以来3期ぶりに授業評価アンケートを行う機会となった2011年度後期末に、それを利用したわけである。ご案内の通りこのアンケートでは授業に対する意見、具体的には「1）良かった点」と「2）改善してほしい点」を、自由に記述できることになっている。

今回はさらに3)として「教員の創意工夫として思い当たることがあれば、具体的に書いてください」という設問を追加し、この拙文に材料を提供してもらおうと考えたのである。対象となるクラスは、社会創生学科1年生を中心とするクラス（受講者29名）、栄養学科および口腔保健学科の1年生向けのクラス（同じく49名）、光応用工学科1年生や保健学科3年生を中心とするクラス（31名）である。このようにアンケートの実施時期もクラスの構成も異なるが、ここではこの11年度後期末の自由記述を使わせていただく。「創意工夫と云って、自分では思い当たらずに困っている。もし何か気づいたことがあったら、どうか教えてほしい」と、率直に依頼したためか、多数の回答が寄せられた（素直ないい子たちだ）。

なお以下の紹介は、筆者の授業に対する受講生の評価の傾向を概観するためのものであり、厳密な統計処理は目的としていない。たとえば、3クラスでの回答内容に有意な差や異なる特徴はとくに見出されないため、以下では合算して扱う。「1)良かった点」と「3)教員の創意工夫」についての回答内容もとくに区別されているようには見えないので、両方の回答をとりあげることとする。また、ニュアンスの違いはあっても同じ傾向のものと考えられる回答内容はある程度まとめた。つまり以下で紹介する記述は、実際の回答そのままではない。また、同じ学生がいくつか異なるポイントを挙げている場合、複数回答として扱った。したがって以下の数字は、受講者109名、自由記述の回答者79名のうち、あるポイントを挙げている学生が何人いるかということを示している。

#### 【授業の進度、授業中の説明】

- ・ 「ペースがゆっくりで、詳しくていねいに教えてもらった。」「自分たちのレベルに合わせ、初心者の視点から基礎をしっかりと教えてくれた。」「説明がとてわかりやすく、理解しやすかった。」など（計26名）

#### 【板書】

- ・ 「板書の字が大きく、きれいで、見やすい。」「板書がていねいで学びやすかった。」（計5名）

#### 【授業の進め方】

- ・ 「授業中に学生を指名し、その回答にもとづいて平常点を付けているが、それが日頃の自主学習につながっている。」（6名）
- ・ 「指名されて発言する内容に間違いがあったとき、どのような間違いなのかを教えてくれたり、何度も問い直して学生の理解に努めていた。」（2名）
- ・ その他  
「様々な口頭パターン練習により、しっかり頭に残った。」「学生同士で会話する時間があり、コミュニケーション能力という点でもよかった。」など

#### 【映像資料】

- ・ 「ビデオを見るコーナーがあることによって、退屈することがなく、集中力にもメリハリがついた。」（3名）
- ・ 「紹介されるビデオは学生の（ドイツやドイツ語への）興味を引いていた。」（11名）
- ・ （ドイツの風景や音楽、またふだん見る機会がないドイツのニュースなど、様々な種類のビデオを通じて）「ドイツ文化やドイツの現状を知ることができ、楽しかった。」「ドイツに親しみを感じた。」など（計55名）
- ・ 「先生自身がドイツで撮影してきたビデオがより明確に印象に残り、おもしろかった。ドイツがより身近に感じられた。」（15名）
- ・ 「音楽紹介ビデオに出てきたドイツ語の表現を解説してくれた。学生の意欲をかき立てやすいと思う。」（5名）
- ・ その他  
「独自に選別してくださったニュースとそれに関する余談がとてもおもしろかった。」「紹介されるビデオがいろいろなジャンルにわたっていて、とてもよかった。もっと深く知りたい、勉強したいという気になった。」「ビデオを通じて、海外に出ていろいろなことを知りたい、視野を広げたいと思うようになった。外国の文化や歴史はもちろん、日本についても学ぼうと思えた。」など

#### 【体験談、授業中の余談】

- ・ （先生の留学時の体験談が）「たいへん興味深く、とてもリアリティがあり、ためになった。」「（これにより）「ドイツ、ヨーロッパをより身近に感じることができた。」「ドイツに行ってみたいと思えた。」「視野が広がり、学習意欲も上がった。」など（計13名）
- ・ 「語学以外のことについての雑談もおもしろおかしく、またためになった。」（3名）

#### 【その他、全般にわたって】

- ・ 「授業のバランスがよかった。ビデオを楽しむ息抜き時間や学生が発言する機会があり、また先生が学生とのコミュニケーションを図るなど、90分間説明するだけの授業とは異なり、飽きることがなく、授業に集中しやすかった。」（2名）
- ・ 「ビデオや音声教材を通じてドイツ語に触れることができ、楽しく学ぶことができた。」
- ・ 「紹介された風景映像に感銘を受け、春休みにドイツに行くことを決めたので、とてもありがたかった。」
- ・ 「ドイツに行きたくなった。」（4名）

- ・ 「クラスの雰囲気がよく、先生がそうなるよう空気づくりに一役かっていた。」
- ・ 「先生（の話）がおもしろい。」「笑ってばかりで楽しい授業だった。」  
など（計5名）
- ・ 「楽しく受講でき、ドイツ語に対して好意がもて、学習への興味がわいた。」  
（2名）
- ・ 「語学に対する苦手意識がなくなったので、とてもうれしい。」
- ・ 「ドイツが好きになる授業で、すばらしい。」
- ・ 「よい思い出になった。」

### 授業の方法と意図

では、筆者の授業の実際と、そこで意識していることについて、以上に紹介した自由記述と対応させながら、簡単に述べてみる。

進度と説明の仕方については、やはり初修外国語であること、受講生の大部分は1年次にのみ履修するということを踏まえて、できるだけわかりやすく、親しみやすくということを考えている。板書についても同様で、チョークは三色を使い分けている。また、色分けや用いる記号の意味も伝えている。

教科書はここ数年、清野智昭『ドイツ語の時間』（朝日出版社、2007年初版）の改訂版（09年）を用いている。これは、対話文を中心にしながら、初級文法の説明、練習問題、リーダー・テキスト、コラム（ドイツ情報）も付いた、いわば総合型の教科書である。CD（音声教材）とDVD（教科書の内容に即した場面の動画）が添付されている。これを用いて、文法や読解の説明のみに力点を置くのではなく、初めての外国語に慣れ親しんでもらおうと、できるだけ受講生を巻き込む形で進めようとして心がけている。たとえば、前回の内容や宿題にしておいた練習問題について、受講生を指名して発音・発表させたり、覚えてたの口語表現のパターン練習につき、ときには受講生同士のペアでやらせたうえで、やはり発表してもらっている。こうしてできるだけ多くの学生たちに口頭で発表させ、その結果を「平常点」という形で記録していつている。基本的にはできるだけ得点させようとしており、期末試験の時期までに「貯金」をしておこうという趣旨である。クラス規模によりまちまちだが、「平常点」が100点満点中20-30点ぐらいを占めるようにしている。

次に映像資料についてだが、そもそも教科書付属のDVDが、対話文の場面だけでなく様々なドイツ情報を含んでいて興味深い。授業では、パン屋や書店、高速道路(Autobahn)などについて紹介した。また、「世界の車窓から」や「世界遺産」といったDVDブックを利用して、ドイツ語圏の都市や田園風景を紹介するときもある。これら既製品の他に、自分で録画したものも用いている。そのひとつが、毎日のようにNHK-BSを通じて入手できる現地のニュース番組である。日本語の通訳が付いているし、ときには副音声でナチュラル・スピードのドイツ語を聴かせることもある。音楽紹介ビデオもときおり使う。これは、もうかなり前のものだが、NHK-E

テレの「ドイツ語講座」の一コーナー「D-POP コレクション」の録画である。このコーナーでは、単にドイツのポップスのビデオ・クリップだけでなく、曲のなかに出てくるキーワードを使った表現も紹介される。筆者はそれに説明を付け加えたり、歌詞の一部を訳してみたりしている。また、筆者がかつてドイツを旅したときに自分で撮影したビデオを紹介する日もある。これは、筆者がドイツ語教師になった最初の年である 1993 年の夏休みに、フランクフルト（マイン）、トリーア、ハンブルク、ベルリン、リンツ、ミュンヘンの 6 ヶ所で収録したものである。ところどころ筆者自身も画面に登場している。このように古く、また素人が撮影・編集した代物であるが、いまだに一部の受講生は、既製品 DVD の美しい映像以上におもしろがってくれるようだ。無論、非常に限られた時間のなかでのことだが、「ビデオ紹介コーナー」は毎回設けている。コンテンツは、多様性という点を意識して選んでいるつもりである。

さらに、教科書や映像資料の内容に関連づけて、留学時を中心とする筆者自身のドイツ体験を語ることも多い。余談・雑談ではあるが、日本との違いを際立たせ、他方共通性にも気づかせるように、留意しているつもりである。日の長さの季節変動のことから大学制度、週末の営業制限とキリスト教、年末年始の過ごし方、職人世界の伝統などをとりあげて説明した。

以上のように、一つ一つは平凡なことでも、初学者向けにドイツ語の初歩の堅実で明快な説明を心がけ、学生同士の表現練習、学生の発表と筆者とのやりとりなど、オーラル面の練習も重視し、さらに教科書以外にも様々に教材や資料を求め、ドイツ紹介のための映像資料や体験談をも織り込み、というように欲張って多面性を追求するのが、筆者の授業の特徴なのかもしれない。しかし、これらのいずれをも重視して十全を期そうとすると、いくら時間があっても足りないことになる。これが実は、常に悩みである。結局のところ、ポイントはバランスとメリハリであろうが、いつも意識してはいるものの、なかなかうまくいっているとは言い難い。また、いつもどのクラスでもだいたい同じように授業を行ってしまうのだが、どのような授業の構成や進め方が適しているかは、やはりクラスによっても異なるであろう。

以下、このあたりのことについて、授業評価アンケートに見られる「2) 改善してほしい点」にも触れながら（こちらの点もとりあげなくてはフェアではないであろう）ほんの少々考えて、「反省とまとめの考察」に代えさせていただきたい。

### 授業の方法とクラスによる受け止め方の違い(?)

筆者の授業に対して「改善してほしい点」として挙げられるのは、だいたいいつも「進度が遅すぎる」、「もう少しスムーズに進めてほしかった」、「ドイツ語についてもっといろいろ知りたかった」というような点である。今回、要約・紹介したアンケートでも、社会創生学科 1 年生を中心とするクラスで 1 名、栄養学科および口腔保健学科の 1 年生向けのクラスで 8 名がこれに類することを指摘している。

社会創生学科や医学科のクラスは、週に 2 回授業があり、2 名の教員が別々の曜日・講時にそれぞれの方法で授業を行っている。筆者の場合、「パートナー」の先生が、文法中心であれ総合型であれ、着々ときわめてスピーディに進めてくださるので、その陰に隠れて好き放題

やっているとも言える。そのお蔭か、これらのクラスでは上記の「改善してほしい点」はあまり指摘されない。「スピーディに進める先生の授業の補足を兼ねた、ちょっとおもしろいドイツ語およびドイツの社会と文化に関する授業」というような位置づけであろうか。

週に1回だけ、1年間同一の教員が担当するクラスが問題になるが、工学部を中心とするクラスでは、ゆっくりした進捗はおおむね好意的に理解され、この点を「改善してほしい」という声はほとんど聞かれない。今回の例でいえば、栄養学科および口腔保健学科のクラスで、上述の通り、進捗について「改善してほしい」とする意見が比較的多く見られた。ある程度外国語学習に対して素養や積極的意欲をもつ受講生が多いクラスということであろうか。この他には「改善してほしい点」はほとんど指摘されていないが、この種の声が挙がるということは、外国語の授業としては重大な欠陥を有すると言うべきかもしれない。上に紹介した「笑ってばかりで楽しい授業」というのは、語学の授業にはあるまじき姿ということであろうか。

上にも述べたが、筆者としてはこれまで、1年次にだけ履修するクラスを含めて、大部分の受講生がこの初めて接する外国語に対して興味をもてないまま、苦手意識とともに1年間を終える、というようにはしたくないと考えてきた。また、せつかくの機会なので—この場合たまたまドイツ語圏だが—、未知の社会や文化に対する興味をかき立て、異文化を知ることや自分たちの環境との比較を通して若い頭脳を刺激したい、彼・彼女らの「頭のなかの引き出し」が少しでも豊かになれば、というように考えてきた。そういうのは教養科目の役割であって、外国語の科目たるもの、その技能の向上に資する授業に専心するべし、とお叱りを受けるであろうか。この点については、筆者の実践例の紹介が関係者の間での討論のきっかけとなれば幸いである。

いずれにせよ進捗については、速ければよいというものではないだろうが、他方ゆっくりしていねいであればあるほどよいとも限らないのであろう。進捗について「改善してほしい」としている学生たちも、ゆっくりで詳しい説明、映像資料などを通じた日常表現やドイツの紹介という点については肯定的である。再び、つまるところバランスとメリハリの問題というところに落ち着くのであろうか。今後、よりいっそう心したい。

以上の「考察もどき」は、それを検証するための厳密な（追跡）調査を伴っておらず、上に述べたことは、これまでの拙い経験にもとづく漠然としたイメージの域を出ない。それでも、同じように週に1回、（初修）外国語のクラスを担当する先生方やFDの議論に参加しようという受講生の皆さんに、討論の素材ないし何らかの意味での参照例を提示できたであろうか。そうであるならば、今回ここでの筆者の最低限の役割は果たせたことになる。ということにしていたきたいのだが（結局最後まで困った…）。